

変化するネワールの人生儀礼をめぐって

—肉ある儀礼から『出家』式へ—

東北大学大学院文学研究科／宗教学 工藤 さくら

I. はじめに

2008年に王制を廃止し連邦民主共和国に移行したネパールは、それまで三度の民主化の波を経験してきた。二度目にあたる1990年代初めには、北インドを中心にダルマパーラによる仏教復興運動が興隆し、このとき初めてネパールの民衆にテーラヴァーダ仏教が広く認知されるようになった。民主化運動と連動し徐々に市民権を得るようになったテーラヴァーダ仏教は、多彩なアプローチで信者を獲得していったが、それでも一部の儀礼がネワールの伝統的なものと代替するまでに社会的に大きな存在になっているということは、あまり知られていない。本発表では、その儀礼を取り上げ、現代ネパール社会における信仰の一側面を捉えることを目的としている。

II. 研究目的

本発表は、現代ネパール社会における儀礼の変容を俎上に、人生儀礼が人々にどう実践されているかを分析することを目的としている。対象の儀礼は、ネパール社会において女兒が一生のうちに経験すると言われる3つの結婚儀礼：イー（バルの実¹との結婚）、バーラ・タエグ（入窟・太陽との結婚）、ヴィバーハ（人との結婚）のうち、二度目のバーラ・タエグに代替して、テーラヴァーダ仏教僧院で行われるようになったリシニ・プラバジャー（沙弥尼出家）である。この2つの儀礼を対照化し、前者から後者に代替可能である要因を検討することで、現代のネパール社会における信仰形態の一側面を描き出したい。

本発表における調査データは、発表者が2013年8月～2016年4月にネパール、カトマンドゥ市にある尼僧院（ダルマキールティ僧院）と農民カーストの参与観察の中で収集したものを使用した。

III. ネワール

A. 社会形態

1. ネワールは、ネパールの現在の首都がおかれているカトマンドゥ盆地を中心に13～15cに王朝を築いた民族で、チベット・ビルマ語族に属すネワール語を母語としている。人口は、約124万人で全人口の約5.48%である（Census 2015）。父系制を基盤とする親族集団、祭祀集団、互助組織を中

¹ *Aegle marmelos*（学名）インド周辺の乾燥地帯において広く見られる植物で、8 cmほどの黄緑色の実をつける（Arya Vaidya Sala 1993: 54）。サンスクリット語のヴィルヴァー（Skt. *vilvāḥ*）で、ネパール語でベル（Np. *bel*）、ネワール語でビャー（Nw. *byā*）を指す。

心に人生儀礼や祭祀が行われる。ヒンドゥー教と仏教が融合した独自のカースト形態を持ち、生まれや接触・水の授受におけるけがれの観念、儀礼面ではカースト間のサービスの授受がみられる。基本的にはカースト（ジャート²）内婚が好ましいとされる。

B. ネワールの信仰形態

ネワールの世帯には、各世帯ごとに家庭祭司がおり、基本的には、高カーストに位置付けられるヒンドゥー教徒のラジョパディヤ・ブラーマンか、仏教徒のバジュラチャールヤに人生儀礼、冠婚葬祭などの祭祀を依頼する（図1を参照）。しかし、不浄カーストに位置付けられる低カーストの一部はこれとは異なりナエ・グバジュという低カースト出身の祭司に儀礼施行を依頼するため（中川 2016 : 91-92）、例外的である。人生儀礼について例にとると、ブラーマン祭司を招く世帯では、サンスカーラ（Saṃskāra）に基づく16の祭祀が行われ（Tachikawa 2001）、他方、バジュラチャールヤ祭司を招く世帯では、ダシャカルマ（Daśakarma）に基づく10の祭祀が行われるとされているが、不浄カーストはこれらのすべてを行っているとは言えない。このように先行研究において、どの系統の家庭祭司を呼ぶかによって、仏教徒であればダシャカルマの儀礼次第を人生儀礼に位置付けて行

図1 ネワールのカースト

（Greenwold 1978 : 485-486, Gellner 1992 : 47をもとに発表者2015年のデータを加筆、パーセンテージはネワール全体における人口の割合）

² ネパールでは、「ジャーティ」を意味するジャートという言葉が民族、さらに宗教を示すため多義的で、さらにジャートとカーストはほとんど区別されずに使用されている。石井は、カーストを「世襲的身分範疇」と定義し、ネワールのカースト・システムを説明する（石井 1980）。

い、他方、ヒンドゥー教徒の多くはサンスカーラの次第に合わせて人生儀礼を行うという説明がなされているわけだが、両者は人生儀礼を行う祭司という立場において相対的に大きな違いはないとされている。1953年にネワールの社会構造を調査したフューラー＝ハイメンドルフは、「仏教」「ヒンドゥー教」という概念は信仰実践の中で調和的に見られ、主要なヒンドゥー教の神々がブッダの守護神であるという言説や、仏教徒にも開放的なヒンドゥー教寺院、そして年中行事においては、同じ儀礼行為における両者の「協力」が見られる点を指摘し、ネワール社会における「仏教」「ヒンドゥー教」は非常に柔軟な概念であることを指摘している³。

また、ここでいう仏教とは、「ネワール（ネパール）仏教」と称されるネワール社会に見られる民族仏教であり、ネパールに見られる他の仏教、すなわちチベット仏教、ラマ教、テーラヴァーダ仏教とは異なる。ネワール仏教では、主にバジュラチャールヤ、サキヤという姓の世帯に生まれた成員を仏教サンガに構成し、そのうち各世帯から最低1名の成員が家庭祭司としての役割を世襲する。このサンガは、仏教の祭事での役割分担のほか、結婚や葬送の際に互助を行う互助集団としての役割も担っており、ネワール社会で節目となる行事や日常生活においても重要度の高い集団である。前者以外のカーストにもそれぞれグティ（Guthi）と呼ばれる互助集団があり、社会生活を支えている。ネワール仏教は、大乘仏教の金剛乘に位置付けられ、在家で妻帯する慣習がある。在家の形式をとるようになった経緯は、ヒンドゥー教を信仰する統治者によってヒンドゥー国教化が進められ、カースト制度が導入されるなどの変化がおこった近世の時代に、出家僧を在家化させる動きがあったなど諸説あるが、紙面の関係もあるためここでは割愛する。

宗教的な系統のみならず、カースト（またはジャート）ごとの差異や、世帯ごとの違いは多少見受けられるが、本発表では、2つの儀礼構造を対照的に示すためダシャカルマを例に取り上げて論じる。

C. ダシャカルマに基づく人生儀礼

1. クリヤ・サングラハ（*Kriyā Saṅgraha*）とクリヤ・サムッチャヤ（*Kriyā Samuccaya*）をもとにクワー・バハー（僧院）のクラダッタ・ヴァジュラチャールヤ（*Kuladatta Vajrācārya*）によって書かれた儀礼書によると、ダシャカルマの内容は以下のものである。また、ネワール語には Nw. と表記、ネパール語には Np. と表記し、固有名詞として認められるものは斜体で示した。[] 内には儀礼の主な内容を記した。

1-1. ジャーター・カルマアビシェーカ（Skt. *jāta karmābhiṣeka* [誕生儀礼]）

(1) 誕生

(2) カーヤショーダナ・クリヤー（Skt. *kāyaśodhana kriyā*）

³ (Füerer-Haimendorf 1956 : 18) フューラー＝ハイメンドルフは1953年にネパールでフィールドワークを行ったが、その成果は「ネワール社会構造の諸相」に記されている。また、仏教とヒンドゥー教の共存について、ラリトプル市にあるネワール仏教クワー・バハー僧院で調査を行ったゲルナーは、ネワールの高カースト仏教徒の信仰するネワール仏教が、声聞乗・大乘・金剛乗を階層的に包括しているとし、その構造の「階層的包括」にはヒンドゥーの階層原理が働いているとする (Gellner 1996)。

- (3) シャーンティ、スヴァスティ・ショーダナ (Skt. *śānti, svasti śodhana* [浄化と悪霊払い])
- (4) シーマンタ・ヴィディ・アービシェーカ (Skt. *śimanta vidhi ābhiṣeka* [へその緒切断])
- (5) ウパナヤナー・アービシェーカ (Skt. *upanayanābhiṣeka* [光の祝儀])
- (6) ジャーティ・アービシェーカ (Skt. *jāti ābhiṣeka* [カースト集団への加入])
- 1-2. ナーマ・アービシェーカ (Skt. *nāmābhiṣeka* [命名式])
- 1-3. アンナプラーサーナ・アービシェーカ (Skt. *anna-prāśanābhiṣeka* [お食い初め])
- 1-4. チューダーカルマ・アービシェーカ (Skt. *cūḍākarmābhiṣeka*)
バレ・チュエグ [(Nw. *bare chuyegu*): 仏教徒のイニシエーションでバネジャ・チュエグ (Nw. *banneja chuyegu*) の変化したもの]
- 1-5. ヴラターデシャ・アービシェーカ (Skt. *vratādeśābhiṣeka*)
[ヒンドゥー教徒のイニシエーションであるブラターバンダ (Np. *bratābanda*) または、ケーター・プージャー (Nw. *kāyṭā pūjā*)]
- 1-6. ストゥリー・ヴィディ (Skt. *strī vidhi*)
- (1) パーニグラハーナ・アービシェーカ (Skt. *pāṇigrahanābhiṣeka*: イー (Nw. *ihī*))
- (2) ラジャサ・アービシェーカ (Skt. *rajasābhiṣeka*: バーラ・チュエグ (Nw. *bāhṛa chuyegu*))
- 1-7. アーチャールヤ・アービシェーカ (Skt. *ācāryābhiṣeka*: アーチャー・ルエグ (Nw. *ācāḥ luyegu*))
- 1-8. スバヤンバラ・アービシェーカ (Skt. *svayamvarābhiṣeka* [結婚])
- 1-9. ディークシャ・アービシェーカ (Skt. *dīkṣābhiṣeka* [男性/女性のイニシエーション])
- 1-10. スタヴィラ・アービシェーカ (Skt. *sthavirābhiṣeka* [年長者 (Nw. *thakāli*) または長老 (Nw. *āju*) 任命式])

2. 農民カーストの行う人生儀礼

一方で、発表者が調査を行なったカトマンドゥのネワールの農民カースト (図1のⅢ-a) 世帯では、以下の人生儀礼が慣行されていることが確認できた。

2-1. 誕生

ベンキュー [浄化儀礼: 一連の行為を行うのは産婆]

2-2. ジャンクまたはマチャ・ジャンコ

[命名式: 占星術師 (Jośi、図1のⅡ-b) に生まれの星の位置を記した書付 (Np. Nw. *cinā*) を見てもらう、またこれの作成を依頼する]

2-3. ジャー・ナケグ [お食い初め]

2-4. a. 男児成人儀礼

ケーター・プージャー (Nw. *kāyṭā pūjā*)

b. 女児成人儀礼

(1) イー (Nw. *ihī*)

(2) バーラ・タエグ (Nw. *bāhṛa tayegu*)

2-5. ビバーハ [結婚]

2-6. ジャンコ [長老式]

(1) 77歳、(2) 88歳、(3) 100歳が任意で行われる

チューダーカルマ・アービシェーカ (1-4) に当たるバレ・チュエグは、ネワール仏教徒の高カースト (サキヤ、ヴァジュラチャールヤ) の男児に対してのみ行われる儀礼とされており、一部のカーストに特化した人生儀礼であることが分かる。さらに、アーチャールヤ・アービシェーカ (1-7)、ディークシャ・アービシェーカ (1-9) もヴァジュラチャールヤに対して行われる儀礼であるため、同様に他カーストには施されない。また、スタヴィラ・アービシェーカ (1-10) は、長老式 (2-6) に相当する。農民カーストの事例から分かるように、高カースト以外の人々はダシャカルマの10の儀礼全てを行なっているとはいえ、基本的に、カーストの生まれに左右されない6の儀礼を行なっている。しかし、これらの儀礼がダシャカルマに対応して行われていることは明らかで、ネワールの行うべき文化 (Np. *samskṛti*) として人々に捉えられている。

慣用表現では、「ネワールの女性は人生で3回結婚する」と言われているが、最後の“実際の結婚”以外は、一般的に考えられる「結婚」と同じようには捉えられておらず、先行研究においては擬似結婚儀礼 (mock-marriage ceremony) として対象化されてきた。一度目の擬似結婚儀礼であるイー (1-6(1)) は、女兒の年齢が4歳⁴~10歳くらいの間に行われる⁵。イー儀礼は、ベルの実という植物との儀礼的結婚を主に行うもので⁶、祭司による礼拝のほか、女兒への固形物の食い初め (Nw. *ihimacā nakegu*)、ヤギなどの動物供儀を伴うナーヴァ・カンニャ女神への儀礼が行われる。供儀された動物は女兒らへの儀礼食の一部に使用される (Gutchow 2010 : 151)。グッチョウによると、バーラ・タエグの前段階として行われる擬似結婚式のイーの段階で、女兒はカンニャ (初潮前の処女) の状態からクマリ (未婚=処女の少女、神の化身) の状態になり、イーを終える頃には女兒たちはカンニャでもクマリでもなく、フキ (父系親族集団) の一員として成人したとみなされるという。要するに、カンニャやクマリは、単独的で処女の状態の女性という意味を含んでいるが、儀礼を通して、生家の成員としての意味合いが付与される。イーによってヴァージンを失った女兒は結婚するまでの間、父方親族の一人として正式に成人したとみなされ、結婚と同時に夫のフキに移行すると説明される

⁴ 4歳の誕生日でヨーチャマリ (米粉で作った蒸菓子) のプジャをする前には行われたいと思われる。しかし、実際には各世帯により異なる。1度目のイーと2度目のバーラ・タエグの間隔が近いので、イーは多くの世帯で5歳前後の早い段階で行うようである。

⁵ その起源は、中世ネワール王朝時代とされており、スティティ・マッラ王の時代には、イー儀礼 (または男児の成人儀礼) を行うまえに亡くなった女兒を担架 (*khāta*) に乗せて運んではならず、喪主らの手で直接運ぶべしとされていた (Pandit Vaidya 2010 : 109)。

⁶ 女兒の配偶者となるベルの実は、ヒンドゥーの大多数はヴィシュス神やナーラヤーナ神との結婚であるとし (Vergati 1982 : 278)、その証人としてのシヴァ神を象徴するものと説明する。仏教の大多数は、スヴァルナ・クマラとの結婚であるといい、ベルの実はクペーラやジャンバラを象徴すると説明される。(Gellner 1991 : 112)

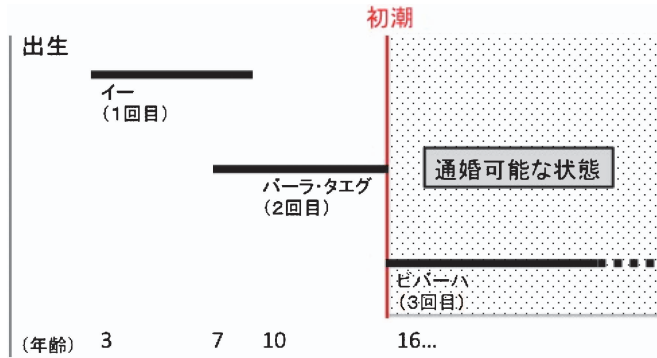


図2 儀礼時期と状態の変化

(ibid : 159-162)。

二度目の擬似結婚儀礼のバーラ・タエグ (1-6(2)) は、7歳～15歳くらいの女兒が12日間、光の閉ざされた部屋で禁欲的な生活をするを主とする儀礼で、12日目に沐浴して身を清め、太陽の光を見ることにより結婚とみなす。初潮を迎える前に行うことが望ましいとされる。また、このバーラ・タエグを経て初めて、女兒は実際の結婚をするにふさわしい状態となり、成人女性として扱われる。研究者の多くは、バーラ・タエグを、クルデョー（一族の神）の儀礼を行う親族集団であるフキ（父系親族）との関係を強める儀礼であると指摘している (Nepali 1988 : 112, Gutchow 2010 : 160)。これは、光を避ける12日間の儀礼期間、フキの人々が不浄を共有し、吉祥とされる他の儀礼への参与を自粛するという行為からも説明される⁷。儀礼時期と状態の変化を図示すると図2のようになる。

IV. 2つの女兒人生儀礼

A. 《肉ある儀礼》「嫁入り前の最終準備」

1. バーラ・タエグの逐語的意味

タクルのネワール語辞書によると、*bārḥa* とは、1) 囲い、防壁、2) ドアの留め具、3) 不浄の観念または不浄からの分離、特に、女性の月経中の分離規制についてを指して使用されると説明する。*tayegu*（語幹 *taye*）とは、置く、添えるという意味であるため、バーラ・タエグは赤不浄の隔離期間と捉えることができる⁸。バーラ・タエグのほかにバーラ・チュワグ⁹ という言い方があるが、これらは同じ儀礼を指し、その使い分けについて、初潮を迎える前に行う儀礼をバーラ・タエグ、初潮の最

⁷ 女兒の姉妹で婚出した者や母方の親族は不浄を共有しない (Nepali 1988 : 113)。

⁸ 1973～1976年にカトマンドゥ盆地のネワール社会を調査した社会人類学者のレヴィによると、バーラ・チュワグ (*Bārḥā cwa(n)gu* やバーラ・タエグ) とは、昔は生理自体を指し、女性の初潮期間中の行いを擬似的に行う、初潮サンスカーラとして位置付けられると説明する。また、バーラは「儀礼的制約 (ritual restrictions)」を意味し、チュワグは状態や活動の継続性を意味する一方で、タエグは、チュワグよりも活動性を帯びたニュアンスがあったとした (Levi 1990 : 765)。要するに、同様の儀礼を指すバーラ・タエグとバーラ・チュワグの相違点は、前者が初潮以前に行うというニュアンスを含意しているのに対し、後者は、まさに今現在、初潮を迎えている状態にあるという区別がなされている。

⁹ *cwagu* には、～している、～（という）状態だというように現在の状況を説明する意味がある。

中に行う儀礼をバーラ・チュワグと区別していたとする説明が一般的になされている¹⁰。

2. 儀礼の位置付け (表1を参照)

現地語の書籍における人生儀礼についての説明では、女兒は年齢に達するとバーラ・タエグ (またはバーラ・チュワグ) という儀礼を行うのが通例であることが説明されており、この儀礼がネワールの伝統的慣習であると言及されている。バーラ・タエグは女兒に対して行われる成人儀礼という通過儀礼としての側面を持つほか、神との儀礼的結婚によって、のちに女兒が結婚を経た後に夫に先立たれたとしても寡婦にならないという合理的説明がされる。また、すでに述べたようにバーラ・タエグを終えた女兒は、実際に結婚ができる状態と言われ、社会的に公認される結婚可能な状態への移行として儀礼を捉えることができる¹¹。儀礼は、特に12日目に行われる儀礼に合わせて占星術に則って月齢自分の吉祥日 (Np. *sait*) をみて選定される。初日～4日目、または6日目までは生理期間と見なされ、通常の生理期間と同じように沐浴の禁止の他、塩抜きなどの食事の規制があるが、4日目、または、6日目の沐浴後は肉を含んだ儀礼食をとることができる。しかし、女兒が二度目の沐浴をする12日目の沐浴時までフキ (父系親族) は不浄を共有する。一方で、母系親族は不浄を共有しないが母方の叔父は主に儀礼準備における費用をまかなうことになっている。このように、儀礼を行うにあたって父系親族の誰かに喪中はいないか、(母方の叔父は健在かなど、) 族の都合や時期の調整が必要となるため、バーラ・タエグは親族の協力が非常に重要な儀礼であると言える。

B. 《「出家」式》「受戒候補生」

バーラ・タエグの代替として近年行われるようになったリシニ・プラバジャーは、1940年代前後からネパール国内で徐々に市民権を得ているテラヴァーダ仏教僧院で行われている¹²。首都カトマンドゥにおいては、カトマンドゥの商業地区の中心部に位置するダルマキールティ尼僧院 (Dharmakīrti Mahāvīhar) で、年間を通して行われている。

1. リシニ・プラバジャーの逐語的意味

リシニ・プラバジャーとは、パーリ語で *isi-prabbajjā* にあたるサンスクリット語の *ṛṣi + pravrajyā* を語源とし「修行者 (リシ) の前身」を意味する。仏教徒以外の出家・世俗放棄も意味し、得度・受

¹⁰ レヴィによると、ラジョパディア・ブラーマンの慣習では少女は、初潮前に結婚しなければならず、初潮が始まるまで生家で過ごすか、初潮が始まるとすぐに生家に戻らなければいけなかった。そのため、特に高カーストの間では初潮の前に行うものをバーラ・タエグ、初潮を迎えてから行うものをバーラ・チュワグとして区別している。一方で、中間カーストのマハラジャンなどは、結婚前に儀礼を行なった後も生家やフキ (父系親族) の家にとどまるため、そこでバーラ・チュワグを行い、初潮前段階のサンスカーラに位置付けられる儀礼をバーラ・タエグといい区別する (Levy 1990 : 670-671)。

¹¹ 慣習的に結婚できるという意味で、法律上、女性は18歳で結婚できる。

¹² 僧院とここで訳されるものはビハーラ (Np. *vihāra*) にあたるが、マハラジャンは「カトマンズ近郊村落の変化と『ビハラ仏教』の展開」という論文のなかで、「ビハラ仏教」を宗教活動・奉仕活動への参加、読経、教義の遵守、生活習慣の一部変更など、食生活・年中行事・通過儀礼の変更や取りやめ・服装の変更をする必要性を有すものとし、自論を展開している。(マハラジャン 2005 : 222-223)

表1 バーラ・タエグ儀礼内容 (Nepali 1985とLevy 1990をもとに作成、〔 〕内は発表者2016年12月データ)

	日時	儀礼のながれ	日の設定	規制等
生理期間とされる	1日目 夕方～	<p>女兒の自宅または父系親族の家に光の閉ざされた部屋を用意、女兒はこの日から11日間この部屋で過ごす。</p> <p>1) バーラ・キヤー (<i>Barha-Khya</i>) をおく 父方の年長女性 (<i>Takali-naki</i>) によって礼拝対象であるバーラ・キヤーの人形が作られ、部屋の一角に置かれる。女兒は12日目朝まで日光に当たらないよう、男性 (親族・友人) に会わないよう部屋の中で生活する。 〔テレビなどを見ることも、男性を見るのと同義のため避けられる。トイレへは女性の親族の助けを得てタオルなどで顔を覆って移動する。生理の不浄期間には、沐浴と髪をとく行為が禁止されるためそれに従い行動する〕</p>	占星術による吉祥日 (Np.sait) を見て行われ、月齢は白分であるべき。	<p>・塩、卵、肉ぬぎの食事</p> <p>・実際には初潮を迎える前であっても生理の不浄期間とされるため、沐浴の制限を守らなければならない。 〔また、爪を切る、傷つける=出血する行為をしてはならない〕</p>
浄化①	4日目 早朝 日中	<p>1) 女兒の沐浴 〔父系親族に当たる女性・友人らが豆料理・肉料理が主な儀礼食 (<i>Chhusya-Mussy</i>) を持って女兒を尋ねる。ゲームなどして過ごす。〕 母方の叔父 (<i>pau/pāju</i>, Np.mama) は儀礼食のほか米粉とマスタードオイルの化粧品 (<i>Kon-cheekā</i>)、12のベテルナッツ、12のクロープ、朱粉 (<i>bhuisihā</i>) (Lery1990) を家に贈る。</p>		<p>沐浴による浄化後は、牛乳、肉、干飯の入った儀礼食を食べる。 (Levy1990) 〔沐浴後も爪を切ってはならない〕</p>
浄化②と太陽との結婚	12日目 早朝 日中	<p>1) 親族の沐浴 女兒は沐浴、不浄を共有するフキ (父系親族) の人々が沐浴のち爪切り (<i>Ni-si-yayegu</i>) で浄化。〔女兒の家には床屋カーストの女性が訪れて女兒の浄化を行い、報酬として<i>Kon-cheekā</i>を受け取る。この時、爪は切らず、朱色に足を塗る浄化を行う〕</p> <p>2) 外へ連れ出す (<i>Barha-pikāegu</i>) 〔女兒は父方のおばに布で目を覆われた状態で屋上に連れられ、布を外し「太陽を見た」時に太陽との結婚とする〕</p> <p>3-1) 父方の年長女性による礼拝 (家内) ガネーシュ神 (<i>gamedyah</i>) と太陽に礼拝 (プジャ) し、ついでクマリ女神、一族の神 (<i>kuldyah</i>) と悪霊に対して施し儀礼を行う。</p> <p>3-2) 父方の年長女性による礼拝 (家の外) 〔ガネーシュ神の寺院へ移動し、髪を分ける (<i>sā(n)-pyākegu</i>) 儀礼が行われる。〕 性交渉可能な状態を象徴するとされる (Levy1990)。</p> <p>4) 〔父方の親族からの贈与〕 父方親族の年長の姑から儀礼食 (<i>bhwe</i>) が12回に分けて与えられ、その後、米や衣類などが女兒に与えられる。</p> <p>5) 〔母方親族からの贈与〕 年長者から順に女兒に衣類 (サリーなど) と金銭が送られる。</p> <p>6) 宴会 〔宴会費用は母方の叔父を中心にまかなわれる〕</p>		<p>・フキ (父系親族) の人々の不浄の状態は12日目の沐浴をもって終了</p> <p>〔・12日目まで、親族の女性でも生理中 (4日間の不浄期間) は、女兒の部屋に入ってはならない〕</p>

表2 リシニ・プラバジャー儀礼内容 (2016年発表者のデータをもとに作成)

日時	儀礼のながれ	日の設定	規制等
1日目 (2016.01.11) 夕方～	<p>女兒・保護者はダルマキールティ尼僧院の1階ホールに集合、参加費納入 (250ルピー)、受付を済ます。 (後で書籍を受け取る) 16:30～</p> <p>1) 説明 寺院の世話役のボランティア女性による儀礼の説明。「グファではなくリシニ・プラバジャーですよ」という女兒儀礼と異なると伝えられる。</p> <p>2) 朗誦 尼僧の誦導で三帰依文・五戒律の朗誦</p> <p>3) 着替え 普段着からえんじ色の無垢衣 (niṣini dress) に着替え、礼拝堂のブッタのジャータカの物語を模したものを正面に横一列に整列、保護者らの記念撮影の後、尼僧の誦導で礼拝文・三帰依文・五戒律そして、リシニ・プラバジャーための誓願文を朗唱</p> <p>4) 勉強会 ボランティア女性による五戒律・八戒律の学習 (意味について勉強)</p> <p>5) 保護者、見学者一切の退出 (19:00)</p>	<p>・プース月にも<u>行うことができる。</u></p> <p>・金曜、土曜は僧院 (ビハーラ) での勉強会があるためできない、火曜日は「日が悪い」ということで参加者が集まらないため、それ以外で設定。</p>	<p>・女兒の服装は、尼僧の着るピンクのものではなくえんじ色である。ビーズやプリント柄など模様のないもの (靴下に至る)、髪飾りや、手首の装飾品を身につけないのが好ましい。</p> <p>・生理中も可</p> <p>・八戒律で昼12:00以降の食事が規制されているが、女兒らには、保護者の意見と尼僧らの配慮でチョコバーとジュースが1つずつ配られる。</p> <p>・本来ならば、不殺生戒を守る必要があるため、肉や魚 (ネパール語ではどちらもマスと呼ばれる) は食べない。</p>
夜	尼僧と八戒律の勉強、説法を聞く		
2日目 朝 (僧院内)	<p>7:15～ (女兒・尼僧は瞑想し待機) 保護者らホールに集合</p> <p>1) 尼僧の誦導 礼拝文、三帰依文、五戒律の朗誦。経験のある女兒を見本にして朗誦する場面もある</p> <p>2) ボランティア女性による説明 徳の高い尼僧が入ってきた時にどのような振る舞いをするべきか、布施 (Np. dān) はどのように渡すべきかが説明される。</p> <p>3) ダンマワティ尼僧の朗誦 尼僧の入室とともに女兒らは起立し三礼する。尼僧の誦導で、礼拝文、三帰依文、五戒律までを女兒たちと一緒に朗誦。</p> <p>3) 聖糸儀礼 尼僧、参加女兒、保護者らをひととおり囲むように糸束から白い糸 (Np. paritran dagho) が伸ばされ、可能な限り参加者はその糸に触れるよう指示される。尼僧らによってパナーティバク朗誦 (15分ほど)。朗誦後、一度糸は回収される。</p> <p>4) 布施 仏像への寄進が済むと、女兒は尼僧のところへ行き、右手に白い糸を巻いてもらう。その後、保護者らは尼僧一人一人に5ルピーから10ルピーほどの金銭、菓子など布施を行う。</p> <p>5) 女兒らへ布施 整列する子供達に対して、参加者の親族らが一人ずつ菓子、金銭を渡し、自分の親族にはドレス (クルタスルワールなど) が渡される。</p> <p>6) 女兒らは華やかなドレスに着替えて退出 (8:30)</p>		<p>・尼僧へ敬意のある態度が求められる。起立やお辞儀など。</p> <p>・布施する順番は、子供達が最も後だと保護者への説明。まずはブッタの仏像、次に尼僧、そして子供達に渡すことが説明される。</p>
(僧院外) 日中	<p>7) ガネーシュ(ガネーシュ) 自宅周辺のガネーシュ(ガネーシュ) 寺院に礼拝</p> <p>8) 宴会</p>		<p>・宴会は参加者の居住区の広場かパーティーパレス (催事場) で行われる。</p>

戒を受ける以前の状態である「沙弥」という段階への出家を意味するとされる。ネパールでのテーラヴァーダ仏教の展開を研究したリヴァインは、女性形のリシニとし、リシニ・プラバジャー (r̥ṣini-) と説明しているが¹³、実際には、発表者の調査ではリシ・プラバジャであるという説明も多く聞かれ、厳格に区別されているとは言い難い。しかしながら、本論では、女兒に行われる儀礼であるということを念頭に女性形のリシニ・プラバジャーを採用する。

2. 儀礼の位置付け (表2を参照)

沙弥(沙弥尼)とは在家信者が出家した状態で、戒律(具足位)を受けるべき「候補生」としての段階のことを言い、十戒律¹⁴の遵守が求められている。発表者の調査においては、リシニ・プラバジャーでもっとも重要なのは、八戒律¹⁵(aṣṭasīla)の遵守であると説明される。まず、参加女兒らは礼拝堂に集められ、えんじ色の無垢衣(リシニ・ドレス)と布施を準備して着席する。在家信者が行う三帰依文を全員で朗唱した後、各自用意した無垢衣に着替えふたたび着席し、リシニ・プラバジャーのための誓願文¹⁶を尼僧のあとに続いて唱える。この後、女兒の保護者らは翌日の予定を確認して僧院から退出し、残された女兒らに対し、在家信者団体であるダルマキールティ仏教研究会のボランティア女性が、八戒律の内容や意味についてを教え、尼僧に敬意を示すことなどについての道德教育を行う。

この出家儀礼は、ダルマキールティ尼僧院のダンマワティ尼僧によって1966年に始められ¹⁷、開始当初は12日間行っていた。のちに7、5、3日間と短縮され、最終的には現在の1泊2日の形態をとるようになった¹⁸。占星術による儀礼日の選定はなく、尼僧院で催される礼拝などと重ならないよう、曜日を見て柔軟に日にちが選定される。バーラ・タエグや結婚式の多くが行われないプース月¹⁹にも行われ、月に1回から多い時には月に6回儀礼を提供している。2015年4月25日に発生したネ

¹³ (Levine 2008 : 91-94)

¹⁴ 十戒律(十学処)とは「1 殺生しない、2 盗まない、3 性行為を行わない、4 嘘をつかない、5 酒を飲まない、6 一日一食を守り、午後は食事をとらない、7 歌舞音曲を鑑賞しない、8 装飾品を身につけず、化粧をしない、9 高いベッドや大きなベッドを使わない、10 金銀を受け取らない」である(佐々木 1999 : 61-69)。

¹⁵ 「1 殺生をせず、生き物に対する慈愛の心を持って過ごす、2 盗みをしない、3 性行為を行わない、4 嘘をつかない、5 酒を飲まない、6 食事は午前中に一回だけである、7 歌舞音曲を楽しまず、化粧や装飾品で身を飾らない、8 大きなベッドや高いベッドを使わず、直に床に寝るか小さなベッドで寝る」(佐々木 1999 : 53-54)

¹⁶ 2016年に改定された『ブッタ・プージャーの方法』には、「リシニ・プラバジャーのための誓願文」として「全世界の苦しみから解かれるために、ニルヴァーナ(解脱)を体得するためにリシニ・プラバジャーを与えられるよう懇願いたします。(三唱)」という内容のパーリ語を三唱すると記載される(Buddha Pūjā Vidhi. 2016 : 2)。

¹⁷ リシニ・プラバジャーの開始年については、いくつかの文献で異なる記述がみられるが、ネパールにおけるテーラヴァーダ仏教の展開を研究したリヴァインは、自著で1966年から行われるようになったと述べており(Levine 2008 : 91)、発表者による、ダンマワティ尼僧への聞き取りでも、ビクラム暦2022年(西暦1966年)に同尼僧院で開始されたと説明されたため、1966年に開始されたとするのが妥当だと考えられる。

¹⁸ 12日間、7日間、5日間のリシニ・プラバジャーを行っていた時代には、子供達の学校の長期休暇が西暦月の11月半ばから12月半ばにあたるマンシール月に1ヶ月間あったため、その時期に合わせ年に一度だけ行っていた。現在は、同じ時期の学校休暇は1週間と言われる。

¹⁹ プース月(paus)は西暦月の12月半ば~1月半ばにあたる。一年の中で最も日が短い月と言われ、1日がすぐに過ぎてしまうことから物事が長続きしないとされ、結婚や吉祥な儀礼を避ける習わしがある。

パール大震災以降は、余震の不安や、同年10月前後からのインド国境での経済制裁²⁰を受け、ガスシリンダーや食料、医療品が不足したため、この時から1泊2日になった。八戒律を守るため、食物は肉（魚・卵を含む）を含まない菜食を摂る。また、本来であれば戒律により正午以後の食事は禁止されているが、参加女兒の保護者から「子供たちが空腹に耐えられない」という要望があったため、午後の軽食としてスナック菓子とジュースが用意されている。2日目の早朝には、尼僧の誦導で礼拝が行われ、最後には尼僧らへの金銭、米、菓子などの寄進の後、参加女兒に保護者たちから菓子や新しい衣服（華やかな洋装のドレス等）が布施（Np. dān）として贈られる。それまで無垢衣をまとっていた女兒らは、一連の儀礼が終わるとすぐに新しい衣装に着替え、記念写真などを撮り尼僧院を後にする。帰宅の途中、近隣のガネーシュ神の寺・祠に参拝する人も多く見られる。「出家」を意味するリシニ・プラバジャーだが、この機会を提供する僧院側は参加者のニーズに柔軟に応え、儀礼の内容を対応させてきたことが分かる。

V. まとめ

思想的矛盾を抱えつつ代替する儀礼

先に扱ったバーラ・タエグの儀礼の意味には、儀礼をすることで成人し、夫に先立たれても寡婦にならないという意味づけがされていたが、これに代替するリシニ・プラバジャーでは、出家した沙弥尼として八戒律を守り一時的に出家生活を送る。このように両者は儀礼の意味において思想的矛盾を抱えている。しかし注目すべきは、参加者はそれに疑問を感じていないことである。一方では結婚を良しとし、社会的成人という性行為を認める状態を与え、さらに飲酒・食肉を良しとしている。他方では、出家という俗世を放棄する状態にあるとされる。出家者として無垢衣を身につけるべき場面には、バーラ・タエグでそうするように腕輪や柄物の布など装飾品を用意する世帯も多く、尼僧らに注意を受ける人も多く見受けられた。

では、これまでみてきた儀礼が代替可能な要因について検討してみたい。

1) 時間の制約

バーラ・タエグでは、12日間という時間を占星術の規定のもと選定しなければならず、吉祥日以外に行えないことや父系親族の喪中などと重複してしまうと更に日程が組み見づらくなり、さらに、バーラ・タエグを行う前に女兒が初潮を迎えてしまう懸念があるという難点がある。そのため、儀礼期間も短く占星術の吉祥日以外にも行うことができるリシニ・プラバジャーが選択されると考えられる。多い時には、月6回の機会が用意されているため参加し易く、予想外に儀礼を行う前に生理が始まってしまった女兒もすぐに機会を見つけて参加することが可能である。また、子供達に学校を休

²⁰ 2015年9月20日、2008年王政廃止以後初めて新憲法が制定されたが、制定内容に不服としてインド国境沿いの地域でタル系民族とマデシ（インド系民族）対、ネパール警察部隊が激しく対立し死傷者が相次いだ。インド国境に近い地域における自治権を主張した対立団体は、国境を全面的に閉鎖したため、インドからの物流が滞り、カトマンドゥをはじめとするネパール国内の多くの地域でガスシリンダー、食料品、医療品を始めとする物資不足が起り、国内は混乱した。物資不足は翌年の2016年半ば頃まで続いた。

ませたくない保護者も多い。学校の長期休暇が以前より短くなったことで、人生儀礼に費やす時間が少なくなり、慣習をあるべき形で続けることよりも、教育や社会的な面に価値を置く傾向が見られる。

2) 費用の節約

バーラ・タエグでは、4日目または、6日目の浄化以降に親族が家を訪ねてくるが、その度に食事など提供し接待しなければならないうえ、12日目の特に大きなお祝いと儀礼後の宴会 (Np. boj) をするための準備にともなう家族への肉体的、経済的負担が大きい。リシニ・プラバジャーでは、参加費用も安値で、尼僧らへの寄進が暗黙に求められているものの参加世帯の“気持ち”に委ねられているため、儀礼後に行われる宴会に予算を集中させたり、宴会をしないことで費用を抑えることが可能である。

3) 住居の問題

都市部では、借家や間借りの世帯も多くいるためバーラ・タエグのために女兒が生活するための余分な部屋が確保できないことがある。また、尼僧の話では、参加家族のなかにはセメントの住居では赤土で清めることが躊躇されるために自宅での儀礼を選ばない人々もいるという。

4) 不浄の共有と親族

バーラ・タエグでは、女兒が不浄な状態にある12日間をフキの親族も共有しなければならないが、リシニ・プラバジャーの間中は不浄を共有する必要がない。さらに、女兒が「外に連れ出す」12日目の沐浴の日に合わせ、床屋カーストの女性を招いて浄化をする必要もなくなる。これにより、フキの人々それぞれの信仰活動（吉祥日が重なることが多く、世帯ごと、グティと呼ばれる互助集団ごとの予定が組まれている可能性もある）や服喪などの禁忌にも影響しない。

5) カースト超越的活動

リシニ・プラバジャーは様々なカーストの女兒をカーストの隔たりなく受け入れている。この背景には、バーラ・タエグに見られるカースト的価値観に対するテラヴァーダ仏教側からのアプローチが想定される。ゲルナーは、リシニ・プラバジャーが市民権を得つつある理由として経済的・社会的理由を挙げた上で「ヒンドゥー化されたネワール仏教への疑問」を投げかける形で通過儀礼（イニシエーション）が文化的対立の場になっていることを指摘している（Gellner 2008 : 174-175）。

6) バーラ・キヤー (Nw. kyā おばけ) の災難

バーラ・タエグにおいて最も恐れられているのは、12日間の期間中に女兒が不運にも死亡してしまうことである。そのような場合には、特別な方法で家の地下に埋葬しなくてはならないが、埋葬後も女兒の死霊が浮遊し親族に災悪をもたらすと信じられている²¹。そのため、バーラ・タエグにおい

²¹ (プレム・ラタ・トゥラダール 2013 : 63-69)、映画『バーラ・シー (バーラの霊)』(ラージ・シャキヤ監督)

ては、儀礼の安全を祈願しバーラ・キヤーに対して丁寧な礼拝が施される。バーラ・タエグ期間中の女児の死亡は、ネワールの人々の間で最も避けるべき災難であり、そのような潜在的危険ゆえに、図らずとも避けようとする傾向があるのではないか。

このように経済合理的な形で受容が高まり、代替されるようになったリシニ・プラバジャーだが、実際は、「伝統文化」とされるバーラ・タエグを行うことが理想とされている。テラヴァーダ仏教の女性仏教協会に参加する在家信者の女性（サキヤ、28歳）は、自身はバーラ・タエグを選択し「あなたも経験したほうがいいわよ！ 私たちの文化（saṃskṛti）を守るのがどれだけ大変かわかるわ！」と熱っぽく語っていて、伝統的なバーラ・タエグを行うことが理想的であることがうかがわれた。バーラ・タエグの期間中には、親族の女性たちから生理になった時の正しい振る舞い方を教えてもらったり、祖霊神（pitṛi）や法事（śraddha）などの清浄さが求められる機会に二回に分けて沐浴することや、正しい沐浴の方法を教えてもらう。性教育のようなものを受けることもあると聞く。親族のつながりとジャート内婚を非常に重要視するネワール社会において、代替的に登場したリシニ・プラバジャーは、部分的に画期的な方法を提供していると言えるが、未だに既存の伝統的慣習の枠から抜け出せずにいると言えるだろう。

Ⅵ. おわりに

本発表は、ネワールの人生儀礼の一部が部分的に変化しているという事例を取り上げて分析してきた。まとめの1)～6)をもとに、参加者と僧院側の構図を描くと以下ようになる。

参加者：時間・費用・空間（場所）の節約

尼 僧：仏教の思想的アプローチ

↓

- 人々のカースト的価値観（生理の禁忌や不浄の煩わしさ）を合理的に解決
- 図らずもバーラ・キヤーへの忌避観によりバーラ・タエグ離れが助長

また、本発表は農民カーストの現在の信仰状況を把握する目的で調査を行ったが、参加者の帳簿からカースト比を確認すると、リシニ・プラバジャーへの参加が農民カーストに特有の現象ではないということが分かった。この点をふまえて今後の研究課題とし、考察を進めていきたい。

本発表は、財団法人 三島海雲記念財団に提出した「農民カーストの比丘と戒：ネパール、ネワール族の肉食・飲酒への実践とテラヴァーダ仏教運動」に助成された内容の一部を論ずるものであり、この場を借りて当財団に感謝申し上げます。

〈参考文献〉

（日本語）

生野善應 1995「人生儀礼」『ビルマ佛教—その実態と修行—』厚徳社 pp. 256-262

- 池田正隆 1995 「ビルマ仏教の出家儀礼」「ビルマ仏教の種々相」『ビルマ仏教—その歴史と儀礼・信仰』法蔵館 pp. 138-163, 212-221
- 石井 溥 1980 『ネパール村落の社会構造とその変化—カースト社会の変容—』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 石井溥編 2005 『流動するネパール—地域社会の変容—』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 木村敏明 2002 「トバ・バタックの結婚儀礼とサハラ信仰—メダンにおけるその変容—」『宗教研究』第7巻(3) pp. 73-95
- マハラジャン、ケシャブ・ラル 2005 「カトマンズ近郊村落の変化と『ビハラ仏教』の展開」石井溥編『流動するネパール—地域社会の変容—』 pp. 214-240
- 中川加奈子 2015 『ネパールでカーストを生きぬく—供儀と肉売りを担う人びとの民族誌』世界思想社
- プレム・ラタ・トラダール 2013 「バーラ・キヤー」筆者監訳『ネパールの民話と伝説』（自費出版） pp. 63-69
- 佐々木閑 1999 『出家とは何か』大蔵出版
- 八木祐子 1991 「儀礼・職能カースト・女性—北インド農村における通過儀礼と吉・凶の観念—」『民族学研究』56(2) pp. 181-208

(外国語)

- Arya Vaidya Sala 1993, *Indian Medicinal Plants*. Orient Longman: Madras, pp. 54-58
- Bhikṣuṣ Dhammawatī. 2016, *Buddha Pūjā Vidhi* (ネパール語), Dharmakīrti Prakāāan and Dharmakīrti Bauddha Adhyyan Goṣṭhi
- Douglas, Will Tuladhar 2007, “STEWADING the ancient tradition”, *Matina*. vol. 1(2), Kathmandu: Amrita Shrestha, pp. 16-18
- Fürer-Haimendorf, Christoph von. 1956, “Elements of Social Structure”, *The Journal of the Royal Anthropology Institute of Great Britain and Ireland*, vol. 86(2), pp. 15-38
- Gellner, David N. 1991, “Hinduism, Tribalism and the Position of Women: The Problem of Newar Identity”, *Man*, vol. 26(1), pp. 105-125
- 1996, *Monk, Householder, and Tantric Priest: Newar Buddhism and its hierarchy of ritual*, Cambridge University Press
- 2008, “Initiation as a Site of Cultural Conflict among the Newars”, Neils Gutchow and Axcel (eds), *Growing Up: Hindu and Buddhist Initiation Rituals Among Newar Children in Bhaktapur, Nepal (Ethno-Indology: Heidelberg Studies in South Asian Rituals)*, Harrassowitz Verlag: Wiesbaden, pp. 167-181
- Greenwold, Stephen Michael. 1978, “The Role of the Priest in Newar Society”, Fisher, James F. (ed.) *Himalayan Anthropology*. Paris: Mouton Publishers. pp. 484-504
- Gutchow, Neils 2010, “The *Ihi* Marriage among the Newars of Bhaktapur, Nepal: Spatial Connotations of an Initiation Ritual”, Astrid Zotter & Christoph Zotter (eds), *Hindu and Buddhist Initiations i India and Nepal* (ibid.), pp. 151-165
- Levi, Robert I. 1990, *Mesocosm*, Delhi: Motilal Banarsidass, pp. 670-676
- LeVine, Sarah and Gellner, David N. 2008, *Rebuilding Buddhism: The Theravada Movement in Twentieth-Century Nepal*, Social Science Press and Orient Black-swan
- Nepali, Gopal Singh 1988 (1965), *The Newars: An Ethno-Sociological Study of a Himalayan Community*, Himalayan Booksellers: Kathmandu
- Pandit Vaidya Asha Kaji, 2010, *The Daśakarma Vidhi*, Mandala Book Point: Kathmandu
- Tachikawa, Musashi. Hino, Shoun. & Deodhar, Lalita 2001, *Pūjā and Saṃskāra*, Motiral Banarsidass

辞書

- Vergati, Anne (ed.), Manandhar, Taku Lal 1986, Newari-English Dictionary*, Agam Kala Prakashan: Delhi

《バーラ・タエグの様子》



写真1 「太陽と結婚」の前、
布で顔を覆われた少女



写真2 寺院を参拝する



写真3 女性親族から祝福を
受ける



写真4 親族からの贈り物を受けとる



写真5 クルデョー（一族の神）に
礼拝する

※写真には98年
撮影と表記される
が、2005年に撮
影されたと思われ
る。女兒は当時8
歳だった。



図3 儀礼で使われるバーラ・
キヤーの灯明
(Tulādhār 2011 : 111)



図4 挿絵のバーラ・キヤー（両側）
(トゥラダール 2013 : 67)

《リシニ・プラバジャーの様子》



写真6 僧院の礼拝堂に集合する女兒（無垢衣と布施が用意される）



写真7 無垢衣（リシニ・ドレス）に着替えた女兒



写真8 入室したダンマワティ尼僧に礼をする



写真9 聖糸(Np. paritrāṇ dāgho)を右手に巻く